台大日本語文研究第 14 期
2007 年 12 月，頁 75-102
本文 2007-1120 收稿，2007-1221 通過刊登

# 日語學習動機與其成效之研究
## ——以台灣主修日文之學生為對象——

堀越和男*

## 摘要

本研究將以就學於台灣地區大學主修日語之學生爲研究對象，探索他們的日語學習動機，與其學習成效（日本語能力檢定 1 級之成績）有何關聯。須在怎樣的動機驅引下才能有效的提升學習成效，在此將以實証分析來進行驗證。

首先，他們的學習動機爲「交流的意欲」「享受有能感」「意思傳達的工具」「流行文化以及對日本的好奇心」「對次文化感興趣」共五個，可以確知的是以內發性動機爲中心。這五個學習動機相互影響下形成了一個可變性的激發動機複合體，支撐著他們持續的學習日語，可以確定的是在這當中「對次文化感興趣」也左右著其成效。

關鍵詞：動機、內發性動機、外發性動機、日本語能力檢定、次文化

* 淡江大學日本語文學系助理教授

# Motivations for Japanese Language Study and its Results: Focusing on Students Majoring in Japanese Language at Taiwanese Universities

Kazuo Horikoshi*

## Abstract

The present research focuses on students majoring in Japanese language at Taiwanese universities; the aim of the research is to empirically verify the relationship between the motivations for students to study the Japanese language and the results of their study (i.e., scores in the Level 1 Japanese Language Proficiency Examination), and to determine which motivations are effective for raising academic results. Five main motivations for study were uncovered: “desire to interact,” “enjoying a feeling of competence,” “use as a communication tool,” “interest in pop culture and Japan,” and “interest in a subculture.” These five motivations interact with each other to form one dynamic motivation that supports continued study of the Japanese language. From these motivations, it was clear that “interest in a subculture” greatly affected the results of Japanese language study.

Key words: motivation, intrinsic motivation, extrinsic motivation, Japanese Language Proficiency Test, subculture

* Assistant Professor of the Department of Japanese, Tamkang University

# 日本語学習の動機づけとその成果
## ――台湾の大学で日本語を専攻する学習者を対象に――

堀越和男*

## 要旨

本研究は台湾の大学で日本語を専攻する学習者を対象に、彼らの日本語学習の動機づけを探り、それが学習成果（日本語能力試験一級の成績）とどう関係するのか、またどんな動機づけが学習成果を高めるのに有効なのか実証的に解明しようとするものである。

まず、彼らの学習動機には、「交流の欲求」「有能感の享受」「意思伝達の道具」「ポップカルチャー及び日本への関心」「サブカルチャーに対する興味」の五つがあり、内発的動機づけがその中心をなしていることが分かった。この五つ学習動機は互いに影響を及ぼし合いながら一つの可変的な動機づけの複合体を形成し、彼らの日本語学習の継続を支えており、その中でも「サブカルチャーに対する興味」がその成果を左右していることが明らかとなった。

キーワード：　動機づけ・内発的動機づけ・外発的動機づけ・日本語能力試験・サブカルチャー

* 淡江大学日本語文学系助理教授

# 日本語学習の動機づけとその成果
## ――台湾の大学で日本語を専攻する学習者を対象に――

堀越和男

## 一、はじめに

外国語を習得する際には、学習者を取りまく社会や文化、学習の際の環境、そして年齢や母語、動機づけ[1]等、学習者自身の背景が相互に作用し合い、その習得過程に影響を及ぼすと考えられる。台湾の大学の日本語学科の場合、そこで学ぶ学習者は留学生等一部の例外を除き、一様に台湾に生まれ、台湾という社会・文化環境の中で育ち、国語である中国語を母国語として、大学教育に至るまで台湾の教育制度の中で教育を受けてきた者たちである。そして、大学入学時の彼らの日本語能力はその多くがゼロレベル、あるいは初歩レベルで、年齢は二十歳前後である。しかし、自らの意志で日本語学科の門を叩き、このような同じ背景、同じ条件の下で机を並べて学んだにもかかわらず、しばらくすると学習者間の日本語能力には差が生じ、三年、四年と学習が進むに連れてその差は徐々に開き、卒業時には自分の意思を伝えるのに精一杯という学生がいる一方で、非常に流暢な日本語で話す学生も現れる。では、どうして学習者間にこのような差が生まれるのであろうか、習得のスピードの速い学習者とそうでない学習者の差はどこにあるのだろうか。確かに、これらの問題には個人的な事情や背景等もその習得に影響を与えているため、一概に「これが」ということを日本語学科の学習者全てに対して言うことはできないが、ここでは台湾の社会的・文化的背景が学習動機に与える影響と、その動機づけが学習成果にどう結びつくのかということを中心に、この問題について考えてみる。

[1] 本研究における日本語学習の「動機」とは、日本語を学習したいという気持ち、つまり学習に対する「意欲」や「欲求」と同義であり、「動機づけ」はそれを喚起する要因を指すものとする。

## 二、外国語学習の動機づけ

外国語の学習では、学習者それぞれが自らの動機づけの強さとその内容に基づき目標言語をどの程度身につけようとするのか、そのための努力（労力とそれにかける時間）はどの程度であればいいのかということが彼ら自身の中で自ずと設定されるため、結果的にその成果は動機づけに左右されると考えられる。つまり、学習者を目標言語の学習へと導き、支えようとする動機づけによって外国語学習のベクトルが決定づけられるのである。

動機づけの研究は、1980 年頃から教育心理学的視点による学習者要因を中心とした研究が盛んになり、学習者の内面の意欲が彼らの行動にどうかかわるのかが注目され、「内発的動機づけ」「外発的動機づけ」という分類が用いられるようになった。Deci（1975）は、人がある行動を取る際、その行動以外に何ら明白な外的報酬がないとき、その行動は内発的に動機づけられているとし、その行動の意図が個人の内部にあって、且つその契機となる原因も内部にある場合を内発的動機づけと定義している。つまり、それをすること自体が目的で何かをすること、あるいはそこから喜びや満足感が得られるような行動に関連した動機づけである。それを日本語学習で言うならば、「日本語の勉強が楽しい」、「日本語や日本文化に興味がある」、「日本人と交流したい」といったことが動機づけとなり、実際に日本語を学ぼうとする行為に学習者を突き動かすものである。一方、行動を起こす意図が個人の内部にあっても原因が外部にある場合を外発的動機づけという Deci（前掲）。つまり、金銭的な報酬や他者に認められること等、何らかの具体的な目的を達成する手段として行う行動に関連した動機づけである。例えば、日本語ができると「いい就職口が見つけやすい」、「給料が高い」、あるいは「格好いい」といったものが挙げられる。「内発」「外発」の動機づけが学習者の内部に如何に形成されるかについては、学習者が帰属する社会的・文化的状況やその言語が持つバイタリティー等によって異なる

と考えられているが、それらが台湾という社会で日本語を学ぶ若者たちの心理にこれまでどのような影響を与えてきたのであろうか。

現在、台湾の高等教育機関には 40 を超える日本語学科があるが、1970 年代までは中国文化大学（1963[2]）、淡江大学（1966）、輔仁大学（1969）、東呉大学（1972）の 4 校[3]、80 年代は台中技術学院（1980）と政治大学（1989）の 2 校が加わり、6 校のみであった。更に当時は大学の数も少なかったことや、今のように社会が豊かというわけでもなかったことから家庭によっては経済的な理由等により、大学に進学すること自体、今日よりも困難なものであった。また、その時代は、1972 年に日本と国交が断絶、1987 年まで 38 年間続いた戒厳令下にあり、日本（日本語）に関する情報は制限されていたため、日本語を学ぶ者にとっては決して良い環境であったとは言い難い。しかし、日本語教育を取り巻く環境がこのような状況にある一方で、民間を中心に日台間の経済文化交流が深まっていく時期でもあった。そのため日本語学科の学生達は、日本語の勉強が楽しい、日本文化に興味があるからというよりも、所謂いい会社に入りたい、日本語ができれば収入も増える等、将来日本語を生活の糧にしようという目的で学ぶ者が多かった、と当時を知る者は振り返る。勿論、当時の学生達にも様々な学習動機があるとは思われるが、そのような状況から推察するに、その動機づけ全体に占める外発的動機づけの割合は今の学生よりも大きかったのではないかと想像できる。

## 三、先行研究

台湾の高等教育機関における日本語学習者の動機づけについて取り上げたもので、最も古い記録は鮫島（1993）[4]であろう。この研究では「就職に有利だから」を選んだ者が最も多く、次いで「外国語を勉強したいから」と、その目的は実用性重視の傾向にあるとして

[2] 大学名の後の（ ）内は、日本語学科の設置年を表す。
[3] 当時は「東方語文学系日文組」と称した。
[4] 1993 年 9 月、専科学校（日本の「高専」に相当）国際貿易科の 5 年生 180 名を対象として調査を行った。

いる。また、甲斐（1995）[5]においても「将来の仕事に役立つから」と「日本語はだんだん重要になってきているから」が同率で最も高く、「日本理解に役立つから」がそれに続いており、日本語を学ぶ理由について仕事や日本語の重要性といった将来を見越しての選択が多いと指摘している。

しかし、それらの調査から約10年後、学習動機を探索的に調査した堀越（2006）[6]では、日本語学習動機に六つの因子を抽出し、日本文化の理解や大衆文化に対する興味がその動機因子の多くを占め、日本語を仕事に役立てたいという因子はその中で比較的小さいものであると報告している。また、交流協会（2004・2007）[7]でも、日本文化及び日本語への興味、つまり「知識志向」が将来の就職や留学を目的とする「実利志向」を大きく上回っており、国立国語研究所（2005）[8]の調査おいても、「日本語に興味がある」「日本のものが好きだ」という理由が1位と2位で、「就職に有利だ」というのは5位との結果も報告されている。それ以外にも荒井（2006）[9]では、「日本文化（テレビ・映画・アニメ・漫画・音楽・ファッション等）の影響を受けて」が最も多く、「将来の就職のため」が5位であったことを示すと同時に、この動機づけが10年前、つまり鮫島（前掲）らと比べて低くなったのは、社会経済の変化によるためであると結論づけている。

以上の研究から、1990年代を境に学習者の主要な動機づけは、概して実利を目的としたものから、広い意味での日本文化に関する知識や教養を身に付けようとするものにシフトしたと考えられる。で

---

[5] 1994年3月～4月、大学及び専科学校で日本語を学ぶ786人（「第二外国語」科目として学ぶ者も含む）を対象として調査を行った。

[6] 2004年10月、北部・中部の大学8校の夜間コース（いわゆる「進修部」「在職班」「推広部」）で日本語を学ぶ10代から60代までの男女422名（有効回答）を対象として調査を行った。

[7] （2004）は2003年11月～2004年2月に高等教育機関の96名を対象に、(2007)は2006年9月～2007年2月に調査を行った。

[8] 2003年12月～2004年2月に高等教育機関の2,075名を対象として調査を行った。

[9] 2005年9月、中部の大学の日本語学科の学生1年生から4年生までの学生208名を対象に調査を行った。

は、なぜ学習者の動機づけにこのような変化が起こったのか。次にどのような事情が学習者の背景に存在し、その変化の要因となったのか見てみよう。

## 四、日本語学習動機の変化

90 年代の台湾と言えば、民主化を実現させ、安定した高い経済成長を果たし、社会全体がその豊かさを享受し始めた時期であった。それに加え、人々は親日的で歴史的に日本文化を受け入れる素地を持ち合わせていたことから、日本の文化等に魅力や郷愁を感じる者も多く、「哈日族[10]」という言葉に象徴されるように、それに熱狂する若者たちも現れ、自然発生的に日本ブームが起こった。

また、台湾は日本と地理的文化的に近い関係にあることから人や物の往来が盛んになって日本語の人材や日本に関する情報等の需要も更に高まり、加えて社会では学歴重視による高学歴志向の風潮に後押しされ、既に 97 年には普通高校からの大学進学率が 70%を超えた。進学を控えた多くの高校生にとって目下の目標は大学に入学することであるが、そのような状況を下支えするかのように大学等の日本語学科の数も急速に増加[11]、少子化と相まって、進学は難しいものではなくなり、彼らの進学に対する不安が軽減されゆくと同時に将来への不安も小さくなった。そのため、大学卒業後を見据えてというよりも、その時の自分の興味や関心を重視し日本語学科を選ぶようになっていった。近年、日本語学科の学生達に日本語学習の開始、あるいは日本語学科の入学に際し、何がその契機となったのかについてインタビューすると、大学入学以前に日本の音楽・アニメ・漫画・芸能人・ファッション・ゲーム等の興味や日本への旅行・テレビ等により日本に関心を持ったからとの回答が多く、また

[10] 台湾の漫画家、哈日杏子が 1996 年に「早安日本」の中でこの言葉を作り、広まった。これは一般に日本に好意や興味を持つ若い世代の台湾人を指す。

[11] 1972 年の日台国交断絶以降、大学の日本語学科設置は認められなかったが、1988 年に台湾出身の李登輝が総統に就任するとその状況は一変した。1989 年、国立政治大学に日本語学科が設置されると、その波は台湾全土に広がり、今やその数は、43 校に上る。

在学中にもそれらについて興味持ち続けている者も多い。

つまり、90年代を境としたこの動機づけの変化は、台湾の日本語教育環境を取り巻く社会的状況の変化が彼らの日本語学習に関わる情意的側面に作用したことにより生じたと考えられるが、その具体的な理由についてはMaslow（1954）の「欲求階層説[12]」により人間性心理学の観点から説明することができる。90年代以前、一般的に大学進学の主な目的は、衣食住等、将来生活に関わるものを安定的に手に入れ、安全に暮らすことであった。しかし、その後豊かな時代を迎え進学も容易なものとなりそのような欲求が満たされると、より高次な欲求として、知識を身につけたい、自分を高めたいというように彼らの意識は徐々に変わっていった。その結果、日本語学科で学ぶことを選択した者のその動機づけは、将来の生活の安定を求める実利志向から個人の成長を求める知識志向へとその比重が移行していったのではないかと考えられる。

## 五、台湾の日本・日本文化の受容

今日、台湾の街を歩けば日本の流行歌が聞こえ、CDショップの人気ランキングの上位には、常に日本のアーティストの曲が並んでいる。そして、店には日本のキャラクター商品やグッズが溢れ、日本の芸能界、スポーツ界の話題などが新聞でも賑やかに報じられている。若者の中には翻訳された日本の漫画やアニメを見、日本で開発されたテレビゲームに熱中している者も多く、近年のメディアの急速な発達により茶の間でもテレビをつければ日本の古今のドラマや、料理、旅行等のバラエティー番組が中国語の字幕付きで、あるいは吹き替えで放送され、家族で楽しまれている。日本に関する情報も図書館や書店だけでなく、コンピュータ技術の進歩により情報

[12] 人間の基本的欲求を低次から1) 生理的欲求 2) 安全の欲求 3) 親和（所属愛）の欲求 4) 自我（自尊）の欲求 5) 自己実現の欲求の5段階に分類し、人間は満たされない欲求があると、それを充足しようと行動（欲求満足化行動）するとした。その上で、欲求には優先度があり、低次の欲求が充足されると、より高次の欲求へと段階的に移行するものとした。

インフラが整備され瞬時に大量の情報がやりとりできるようになったことで、パソコンから自由に好きなだけ手に入れられるようになった。また、日本統治時代に日本語を国語として学んだ世代には、日常的に日本語を使う人も多く、その子や孫にとっても日本語は身近な外国語となっている。近年、日本への観光旅行も人気があり、2006 年の 1 年間に日本から台湾への年間渡航者数は延べ 116 万人[13]に上り、台湾から日本への渡航者数はそれを上回る 121 万人を記録したが、日本の人口が約 1 億 2800 万人で、台湾が約 2300 万人であることを踏まえると、日本人に比して如何に台湾人が日本に関心を持っているかが伺える。このような状況と比例するかのように、日本語学習者も年々増加しており、交流協会（2007）の調べでは、主に中等・高等教育機関で学ぶ日本語学習者数は 191,367 人に上り、前回の調査（交流協会（2004））の 128,641 人を大きく上回ったとある。

以上のような台湾の社会的文化的状況は、学習者に日本文化と接触する機会を頻繁に与え、彼らの日本に対する心理的距離を縮めている。そして、同時に学習者は日本に親近感や好意を持つようになり、それによって日本語学習への内発的動機づけが少なからず高まるのではないかと推測される。例えば、日本の歌を歌いたい、日本を旅行したい、日本のことをもっと知りたい等といった欲求が学習者の内面からわき上がることにより、それが契機となって日本語の学習が始まったり、学習に取り組む力・学習を継続する力に転化されていくものと考えられる。

## 六、調査の目的

台湾の大学の日本語学科で学ぶ学習者の、日本語を学ぼうという意欲がどこから湧いてくるのか、彼らの心の中で何が日本語学習を支えているのかを分析し、それが学習の成果にどう影響するものなのか、以下の項目を追って明らかにする。

[13]「中華民國交通部觀光局」（http://www.taiwan.net.tw）を参考。

（一） 日本語学習の動機因子を探索的因子分析によって抽出し、学習を動機づけている要因を明らかにする。

（二） 上記（一）で抽出した因子を基に、学習動機の構造化を試みる。

（三） 上記（一）で抽出した因子の内、学習動機としてどれが最も学習者に影響を与えているのか明らかにした上で、各動機因子の関係について考察する。

（四） 学習動機には男女差があるのか検討し、あるならば男性と女性では何が違うのか明らかにする。

（五） 学習者タイプを学習動機に基づき分類した後、どんなタイプが日本語能力試験で良い成績を上げるのか分析し、どの動機因子が日本語学習にとって有効なのか探る。

（六） 被験者を日本語能力試験の「合格者」群と、「不合格者」群の二つに分け分析し、日本語学習の成果に影響を与える動機因子を明らかにする。

## 七、調査について

### （一）調査の方法

「2005 年日本語能力試験一級」を受験した、台湾の大学 10 校[14]の日本語学科（日間部）に在籍する主に 4 年生の学生を対象に、2006 年 3 月にアンケート調査を実施し、男女 97 名分の有効回答を得た。なお、アンケート[15]は、まず縫部ら（1995）、郭ら（2001）、磐村（2004）を参考に作成し予備調査[16]を行い、その結果と交流協会（2004）を

[14] 東呉大学（26 名）・東海大学（19 名）・高雄第一科技大学（19 名）・淡江大学（14 名）・輔仁大学（12 名）・真理大学（10 名）・台湾大学（9 名）静宜大学（9 名）・銘伝大学（2 名）・政治大学（1 名）の計 10 校で調査を行い、121 名の回答を得た。その内、統計解析上不備のない 97 名分（有効回答率：80.2%）を本研究のデータとする。

[15] 本稿末【資料】を参照。

[16] 真理大学応用日本語学科（日間部）の 4 年生 71 名と大同大学推広部日本語学習者 14 名を対象に、42 項目のアンケートにより 5 段階の尺度法で因子分析を行った。

踏まえ、設問項目数を 11 増やす等、それを 53 項目に設定し直したものを使用した。また、評価は 7 段階法を採用した。

（二）被験者

日本語能力試験は毎年 12 月初旬に行われるが、台湾の学制では秋入学を採用しているため、大学に入学してから 4 年次に一級を受験するまでの学習期間は約 3 年 3 か月である。そして、大学の日本語学科の学習者の場合、その時までに一級合格を目指して学習に取り組むというのが一般的である。また、本研究の被験者の調査時点における学習期間の平均は約 3 年半、年齢は 22.2 歳（SD 1.47）であった。

以上に関連し、本調査における日本語能力試験の合格・不合格及びその男女の人数の内訳を表 1 に示す。なお、本研究において上級者を対象としたのは、3 年半という一定の期間、日本語学習の継続を支えてきた動機づけについて分析し、考察するためである。

表1　合格・不合格及び男女の人数の内訳

| 合格者数 | | | 不合格者数 | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 50 | | | 47 | | |
| 男性 | 女性 | 不明 | 男性 | 女性 | 不明 |
| 9 | 38 | 3 | 19 | 25 | 3 |

## 八、分析と考察

### （一）日本語学習動機の因子の抽出

まず、日本語学習動機 53 項目の平均値と標準偏差を算出し、天井効果（項目 10）と床効果（項目 44）の見られた 2 項目を以降の分析から除外した。次に残りの 51 項目に対して主因子法による因子分析を行ったところ、固有値の変化及び因子の解釈上、5 因子構造が妥当であると考えられた。そこで、再度 5 因子構造と仮定し、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行い、その結果十分な因子負荷量を示さなかった 15 項目（項目 1･3･10･13･14･18･22･23･26･27･29･33･35･39･44）及び、内的整合性の検討により除外したほうがα

係数が高まると思われる 2 項目（項目 36･49）を除き、再度同様の因子分析を行った。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表 2 に示す。なお、回転前の 5 因子で 36 項目の全分散を説明する割合は 56.76%であった。

そして、以上の因子分析の結果から日本語の学習動機に五つの因子を抽出することができた。本研究ではそれぞれの因子を以下のように呼ぶこととする。

第 1 因子（Ⅰ）･･･交流の欲求

日本に好意を持ち、日本の文化や習慣について理解し、日本人と交流したいという欲求。また、日本への留学や観光旅行の際の交流の手段として日本語を身につけたいという気持ち。

第 2 因子（Ⅱ）･･･有能感の享受

外国語ができることは人に誇れることであり、日本語を身につけることにより人から評価されたい、格好いいと思われたい等、有能でありたい、優れていると思われたいという願望。

第 3 因子（Ⅲ）･･･意思伝達の道具

アルバイト先や家族に日本語を話す人がおり、その人とのコミュニケーションの道具として、また、将来の仕事、会社での昇進に役立つ術としての必要性。

第 4 因子（Ⅳ）･･･ポップカルチャー及び日本への関心

日本の漫画や TV ゲーム等のポップカルチャーを楽しみたいという気持ち、及び日本の歴史、文学、科学技術、政治・経済への関心。

第 5 因子（Ⅴ）･･･サブカルチャーに対する興味

カラオケで日本の歌を歌ったり、日本の雑誌や新聞などから日本の最新ファッションや芸能人、スポーツ選手等の情報を手に入れたいという気持ち。

※以下、表及び図中の第 1 因子～第 5 因子の名称は、便宜上Ⅰ～Ⅴとする。

表2 日本語学習動機の因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）

| 項目 | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ | Ⅳ | Ⅴ |
|---|---|---|---|---|---|
| 17 | **1.012** | -.088 | .113 | -.240 | -.040 |
| 16 | **.867** | -.072 | .150 | -.202 | -.025 |
| 11 | **.743** | .030 | -.127 | .127 | .085 |
| 15 | **.614** | .090 | .037 | .036 | -.101 |
| 12 | **.612** | -.111 | -.109 | .354 | .032 |
| 20 | **.583** | .272 | -.193 | .118 | -.171 |
| 52 | **.567** | .057 | -.034 | -.097 | .219 |
| 46 | **.519** | -.046 | .188 | .072 | .210 |
| 4 | **.460** | .076 | -.249 | .351 | .041 |
| 25 | -.136 | **.972** | -.203 | -.055 | -.002 |
| 32 | .215 | **.657** | -.046 | .073 | -.164 |
| 28 | .207 | **.647** | -.271 | -.065 | -.064 |
| 42 | -.136 | **.643** | .101 | -.117 | .353 |
| 02 | .020 | **.627** | -.089 | .009 | .136 |
| 31 | -.023 | **.627** | .220 | .144 | -.122 |
| 21 | .102 | **.459** | .272 | .036 | -.250 |
| 34 | .173 | **.379** | .216 | -.008 | .217 |
| 51 | -.121 | -.075 | **.818** | .062 | .011 |
| 53 | .067 | .070 | **.640** | .191 | -.020 |
| 41 | .179 | -.039 | **.627** | -.077 | .028 |
| 40 | -.132 | .373 | **.582** | -.040 | .001 |
| 43 | -.014 | -.122 | **.575** | .039 | -.051 |
| 38 | .168 | -.225 | **.554** | .254 | -.100 |
| 47 | -.083 | .219 | **.444** | -.075 | .038 |
| 19 | -.049 | -.273 | **.444** | .082 | .090 |
| 50 | -.006 | .300 | **.357** | .036 | .268 |
| 05 | -.207 | -.003 | -.078 | **.760** | .392 |
| 24 | -.188 | -.071 | .110 | **.665** | .045 |
| 48 | .158 | -.054 | .114 | **.579** | -.171 |
| 06 | .148 | -.004 | .058 | **.570** | .212 |
| 45 | .073 | .134 | .124 | **.447** | -.181 |
| 30 | .007 | .134 | .275 | **.414** | -.143 |
| 08 | .040 | .038 | -.091 | .111 | **.743** |
| 37 | -.055 | -.058 | .041 | .045 | **.737** |
| 07 | .339 | .007 | .186 | -.259 | **.498** |
| 09 | .450 | .021 | -.080 | .136 | **.458** |

| 因子間相関 | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ | Ⅳ | Ⅴ |
|---|---|---|---|---|---|
| Ⅰ | — | .45 | .29 | .41 | .26 |
| Ⅱ | | — | .51 | .12 | .14 |
| Ⅲ | | | — | .09 | .12 |
| Ⅳ | | | | — | .07 |
| Ⅴ | | | | | — |

### （二）日本語学習動機の構造

前項の因子分析により抽出された五つの因子を基にして、内発的か、外発的かといった動機づけの分類を縦軸に、そしてその動機づけによって促される行動や意識が自分自身（内向的）に向くか、あるいは他者（外向的）に向かうのかという方向性を横軸とし、この二要因モデルにより日本語の学習動機の構造化を試みる。

まず、前者の動機づけの二分類の観点から考えると、第1因子の「交流の欲求」は学習者が日本人との交流を希望し、そのような活動を現在あるいは将来において行いたいと期待するものであり、第4因子の「ポップカルチャー及び日本への関心」と第5因子の「サブカルチャーに対する興味」も学習者の内面からわき上がる好奇心や関心が日本語学習の誘因となるものなので、この三つの動機因子は概ね「内発的」であると言える。一方、第2因子の「有能感の享受」と第3因子の「意思伝達の道具」の二つは、学習者の欲求を満たす要因が彼らの外部に存在することから「外発的」であると言えよう。

次に、動機づけによる行動の方向性ついて見てみる。まず、第2因子の「有能感の享受」は日本語学習の結果が他者からの承認によって自らの自尊心を満足させることであり、第4因子の「ポップカルチャー及び日本への関心」と第5因子の「サブカルチャーに対する興味」は、日本の文化に関する情報や日本事情等の知識を得ることによって自分の知識欲を満たそうとすることが動機づけとなっている。つまり、他者から良い評価を受けたい、知識を取り入れたいという行動や意識の方向は自分自身に向いており、「内向的」であると言える。一方、第1因子の「交流の欲求」と第3因子の「意思伝達の道具」の両者とも、他者に働きかけることによって得られる、前者は満足感が、後者は利益がその動機づけとなっていることから、その方向性は「外向的」であると考える。

以上から日本語学習動機の構造を図示すると、図1のようになろう。まず、上段の「知識志向」（内発内向的動機づけ）とは、興味や

関心のある最新の日本の文化や日本事情の知識を取り入れようとすることであり、「交流志向」（内発外向的動機づけ）とは日本人と日本語により交流し、そこから喜びや満足感を感じようとすることである。そして、下段の「自尊志向」（外発内向的動機づけ）とは日本語ができることで他者に認められたいと思う欲求を表し、「実利志向」（外発外向的動機づけ）は、日本語が道具として使えるようになることが、就職や仕事、留学等の際に有利に働くことを期待するものである。

図１は、日本語の学習動機はまず「内発的」「外発的」という二つのカテゴリーに別れ、そしてその動機づけによって促される行動や意識が「内向的」か「外向的」かといった方向性の観点から更に二つに分かれるという二要因モデルの構造であることを示している。ここでは、日本語学科で学ぶ学習者に内在する混沌としていた学習動機の構造を統計処理によって整理し、可視化することができたのではないかと考える。

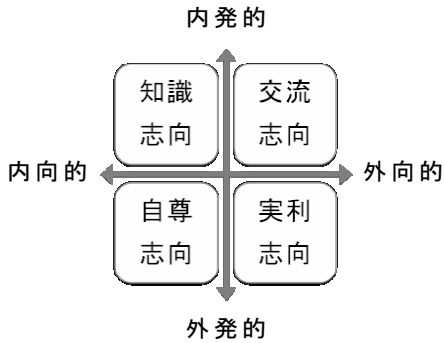



**図１　日本語学習動機の二要因モデル**

そこで、このモデルの妥当性を裏付けるべく、大学の夜間コースで日本語を学ぶ学習者にもこれが適応できるのか、堀越（2006）で明らかにした六つの動機因子、「日本人及び日本文化理解志向」「大衆文化接触志向」「交流志向」「日本社会理解志向」「優越感享受志向」「仕事役立て志向」をこのモデルに当てはめてみたところ、「日本人

及び日本文化理解志向」「大衆文化接触志向」「日本社会理解志向」の三つは「知識志向」に相当し、「交流志向」は「交流志向」、「優越感享受志向」は「自尊志向」、「仕事役立て志向」は「実利志向」と、その全てがこのモデルに対応した。このことから、夜間コースの学習動機についても、このモデルでの説明が可能であることが分かった。よって、以上から図1は台湾の大学で日本語を専攻する学習者の、学習動機の構造を示しているものと言えよう。

### （三）五つの日本語学習動機の関連性

アンケート調査の結果より算出された下位尺度の平均値は、日本語学習を支える各動機因子の強度を表すものであるが、まずその平均値と標準偏差（SD）を求め、内的整合性を検討した後、それらの結果から日本語学習の動機づけとして学習者の学習活動に強く作用するものは何か、また五つの動機因子の相関は何を意味しているのかということについて考察する。

五つの下位尺度の平均値を算出したところ、「交流の欲求」は（平均 5.37，SD 0.88）、「有能感の享受」は（平均 4.62，SD 0.96）、「意思伝達の道具」は（平均 3.48，SD 0.98）、「ポップカルチャー及び日本への関心」は（平均 4.18，SD 1.02）、「サブカルチャーに対する興味」は（平均 5.01，SD 1.11）であった。また、内的整合性を確かめるべく下位尺度のα係数を求めたところ、「交流の欲求」はα＝.88、「有能感の享受」はα＝.86、「意思伝達の道具」はα＝.82、「ポップカルチャー及び日本への関心」はα＝.75、「サブカルチャーに対する興味」はα＝.79と、それぞれ十分な値が得られた。以上の結果に日本語学習動機の下位尺度の相関係数を加え、表3に示す。

表3　日本語学習動機の下位尺度間相関と平均値、SD、α係数

| | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ | Ⅳ | Ⅴ | 平均値 | SD | α |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Ⅰ | — | .47*** | .29** | .43*** | .43*** | 5.37 | 0.88 | .89 |
| Ⅱ | | — | .52*** | .22* | .24* | 4.62 | 0.96 | .86 |
| Ⅲ | | | — | .28** | .22* | 3.48 | 0.98 | .82 |
| Ⅳ | | | | — | .19 | 4.18 | 1.02 | .75 |
| Ⅴ | | | | | — | 5.01 | 1.11 | .79 |

*$p$ <.05, **$p$ <.01, ***$p$ <.001

下位尺度の平均値を見ると、まず「交流の欲求」が最も高く、次いで「サブカルチャーに対する興味」と、日本語学習の動機づけの中で内発的動機づけが上位にあることが分かる。また、下位尺度の相関係数は、各因子間の関連度の強さを表すものであるが、ここでは「ポップカルチャー及び日本への関心」と「サブカルチャーに対する興味」との相関以外は全て有意な正の相関が認められた。これは、それぞれの動機因子が単独ではなく、互いに連動しながら学習者の日本語学習を動機づけていることを意味していると考えられる。例えば、日本のサブカルチャーに対する興味を持つと、日本のことを理解し交流したいという欲求が生まれ、実際日本語を身につけると、更に上手になって人から認められたい、そして日本語を生かした仕事をしたいと思うというように、それぞれ日本語学習の動機因子が連動し相乗効果を生み出している。つまり、彼らの心の中では内発的動機づけを中心に各動機因子が互いに影響を及ぼし合いながら一つの可変的な学習動機の複合体を形成し、それが日本語の学習活動を支えているのである。

### （四）日本語学習動機の男女差

下位尺度を用い、日本語学習動機の男女差を検討するべく $t$ 検定を行ったところ、表 4 の結果を得た。「ポップカルチャー及び日本への関心」（$t(89)=-5.57$, $p<.001$）は、女性よりも男性のほうが有意に高い値を示し、一方「サブカルチャーに対する興味」（$t(89)=2.60$, $p<.05$）では、男性よりも女性のほうが高い値を示した。つまり、日本語の学習動機として「ポップカルチャー及び日本への関心」は男性のほうが有意に高く、女性のほうが「サブカルチャーに対する興味」を持っているということを意味している。なお、「交流の欲求」「有能感の享受」「意思伝達の道具」についての男女差は認められなかった。

表4 男女別の平均値とSD及びt検定の結果

| | 男性 | | 女性 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 平均値 | SD | 平均値 | SD | t値 | |
| Ⅰ | 5.31 | 0.92 | 5.33 | 0.85 | 0.13 | |
| Ⅱ | 4.64 | 1.03 | 4.51 | 0.86 | -0.65 | |
| Ⅲ | 3.50 | 1.05 | 3.46 | 0.89 | -0.19 | |
| Ⅳ | 4.90 | 0.79 | 3.81 | 0.88 | -5.57 | *** |
| Ⅴ | 4.61 | 0.82 | 5.16 | 1.15 | 2.60 | * |

*$p<.05$, ***$p<.001$

次に男女別学習動機の下位尺度間の相関関係を表5に示す。男女とも（男性（$r=.67$, $p<.001$）、女性（$r=.54$, $p<.001$））比較的強い相関を示したのは「有能感の享受」と「意思伝達の道具」の間であり、両者とも外発的動機づけである。表5は、この二つの動機因子が性別にかかわらず、密接な関係にあることを示しており、仕事等の道具として日本語を身につけることと自尊心を満足させることとは深く関係していることを意味している。

一方、「意思伝達の道具」と「ポップカルチャー及び日本への関心」には、男女差が顕著に現れた（男性（$r=.03$, *n. s.*）、女性（$r=.43$, $p<.001$）。女性の場合、日本について学びたいという気持ちは、日本語を道具として身につけたいと思うことと関係しており、これは教養として日本について学ぶことが、将来日本語を生かした仕事に就くためには必要だと考えているからだと思われる。これに対して男性の場合は、相関がない（$r=.09$, *n. s.*）ことから、道具として日本語を身につけることとは関係なく、ポップカルチャーを楽しんだり、日本について知りたいと思うこと自体が動機づけとなっていると考えられる。

表5 男女別の相関係数

| | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ | Ⅳ | Ⅴ |
|---|---|---|---|---|---|
| Ⅰ | — | .41*** | .32* | .39** | .45*** |
| Ⅱ | .47* | — | .54*** | .21 | .23 |
| Ⅲ | .24 | .67*** | — | .43*** | .13 |
| Ⅳ | .58** | .09 | .03 | — | .32** |
| Ⅴ | .38* | .38* | .39* | .19 | — |

*$p<.05$, **$p<.01$, ***$p<.001$

右上：女性，左下：男性

### （五）学習者の三つのタイプと日本語能力

日本語学習動機の尺度を表す因子得点を用い、被験者を動機づけのタイプ別に分類し、どの分類に属する者がよい成績を出しやすいのか考察する。

まず、ウォード法によるクラスタ分析を行い、学習動機のタイプを分類する上で最も適当なのは三分類であると判断し、被験者を三つのクラスタに分けた。そして、第 1 クラスタには 41 名、第 2 クラスタには 32 名、第 3 クラスタには 24 名の被験者が含まれ、$\chi^2$ 検定を行ったところ、有意な人数比率の偏りは見られなかった（$\chi^2$ =4.47, $df$ =2, n.s.）。

次に、得られた三つのクラスタを独立変数、「交流の欲求」「有能感の享受」「意思伝達の道具」「ポップカルチャー及び日本への関心」「サブカルチャーに対する興味」を従属変数とした分散分析を行った結果、その全てにおいて有意な群間差が見られた（交流の欲求：$F(2,94)=29.49$, 有能感の享受：$F(2,94)=28.84$, 意思伝達の道具：$F(2,94)=24.53$, ポップカルチャー及び日本への関心：$F(2,94)=9.99$, サブカルチャーに対する興味：$F(2,94)=30.82$, 全て $p<.001$）。そして、Tukey の HSD 法（5%水準）による多重比較を行ったところ、「交流の欲求」は第 1 クラスタ＞第 3 クラスタ＞第 2 クラスタ、「有能感の享受」は第 1 クラスタ＞第 2 クラスタ＞第 3 クラスタ、「意思伝達の道具」も第 1 クラスタ＞第 2 クラスタ＞第 3 クラスタ、「ポップカルチャー及び日本への関心」については第 3 クラスタ＞第 1 クラスタ＞第 2 クラスタ、最後に「サブカルチャーに対する興味」は第 3 クラスタ＞第 1 クラスタ＞第 2 クラスタという結果が得られた。

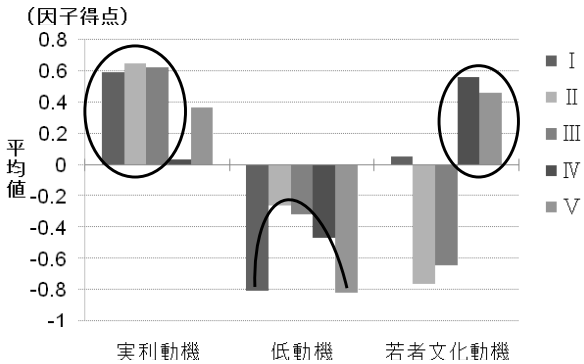



図2　3群の日本語学習動機得点

図2は、分析の結果から得られた三群の各得点の分布を表しているが、それぞれ分類されたクラスタの特徴的な部分からその学習動機のタイプを次のように命名する。第1クラスタは第2・第3クラスタと比較し「交流の欲求」「有能感の享受」「意思伝達の道具」が高いことから「実利動機」とし、それに分類された被験者を「実利動機」群とした。同じく、第2クラスタは全体的に得点が低いことから「低動機」群とし、第3クラスタは群内において「ポップカルチャー及び日本への関心」「サブカルチャーに対する興味」が高いことから「若者文化動機」群とした。

次に「実利動機」群、「低動機」群、「若者文化動機」群の三つグループと日本語能力試験一級の成績との関係を検討するため、各グループに属する被験者のその平均点を算出したところ、図3のようになった。これを見ると、「実利動機」群の平均点は合格ラインの280点、「低動機」群は273点、「若者文化動機」群は294点となり、「若者文化動機」群が三つのグループの中で平均点が最も高いことが分かった。このことからポップカルチャーやサブカルチャー、日本への関心が日本語学習の成果に影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

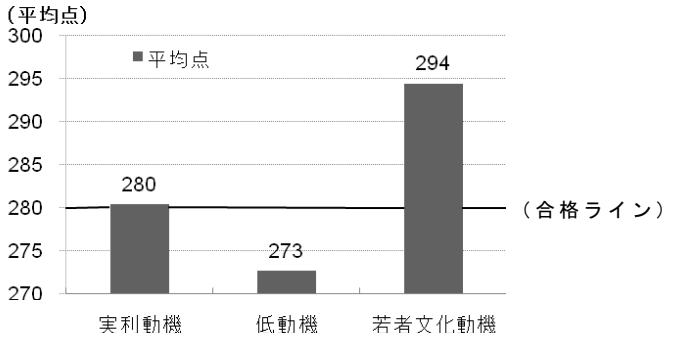



図3 日本語能力試験１級の３群の平均点

### （六）日本語学習の成果に影響を与える動機因子

被験者を日本語能力試験一級の「合格者」群と、「不合格者」群の二つに分けた時、その二つのグループの動機因子にどのような差が見られるのか分析し、試験の成績と動機因子の関係について考察する。

まず、グループ間の人数比率の偏りの有無を $\chi^2$ 検定により調べたところ、有意な偏りは見られなかった（$\chi^2$ =0.09, $df$ =1, n.s.）。次に、合否の別と動機因子群を要因とした二要因の分散分析を行った結果、交互作用は（$F$(4,380) ＝3.33, $p$<.05）で有意であることが認められた。そこで、各因子のいずれに差があるのか因子ごとに単純主効果検定を行ったところ、第５因子の「サブカルチャーに対する興味」($F$(1,95) ＝11.1, $p$<.01) にのみ有意な差が認められた。

つまり、図４からも分かるように、「合格者」群と、「不合格者」群の大きな違いは日本のサブカルチャーに対する興味の強さであり、この動機因子が日本語能力試験一級の合否に関わっていると考えられる。

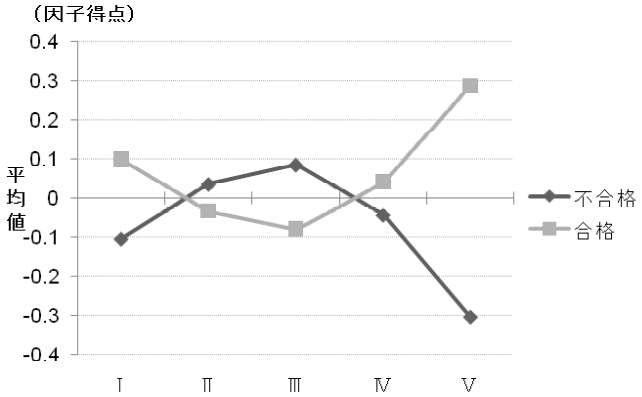



図4　学習成果と動機因子の関係

では、サブカルチャーに対する興味が強いと日本語能力試験の成績は良いのか、各動機因子と成績との相関をピアソンの積率相関係数を用いて調べてみたところ、表6の結果が得られた。これによると、「サブカルチャーに対する興味」と成績との間に弱い正の相関（$r$ =.22, $p$ <.01）が認められ、それ以外の因子と成績との間には相関は確認されなかった。つまり、サブカルチャーに対する興味が強いほど、試験の成績が有意に高くなっていることが分かった。

表6　各動機因子と成績の相関係数

| | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ | Ⅳ | Ⅴ |
|---|---|---|---|---|---|
| 成績 | .00 | −.13 | −.05 | −.04 | .22** |

** $p$ <.01

## 九、まとめ

大学で日本語を専攻する学習者の心の中には、個人差はあるものの、日本語の学習活動を支える内発的動機づけと外発的動機づけが渾然となって存在している。一昔前、台湾の大学の日本語学科では、日本語は多くの学生にとって将来生活の糧となるものであった。しかし、今や台湾は自由で豊かな時代となり、彼らの日本語学習の支

柱となる動機づけは外発的なものから、内発的なものへとその比重が移ってきていると思われる。

彼らの持つ動機づけについてこれまでその構造ははっきりとは分からなかったが、本研究ではそれを探索的に分析し二要因モデルで捉えることによって説明した。そして、それは「交流の欲求」「サブカルチャーに対する興味」といった内発的動機づけを中心に、五つの動機因子が互いに影響を及ぼし合いながら一つの可変的な学習動機の複合体を形成しており、その中でも「サブカルチャーに対する興味」が彼らの日本語学習を支える一つの共通した柱となって、その成果に影響していることが分かった。確かに、本稿の冒頭で問題提起した学習者間に生じる日本語能力の差の因果関係を、動機づけだけで全て説明することはできないが、「サブカルチャーに対する興味」という日本語学習を支える柱がしっかりしたものであれば、それぞれ相関を持つ各動機因子が連動し、因子間の相乗効果により、日本語学習へのベクトルが大きく設定されて、その学習の効果が高まり、結果的にその成果に反映されるものと考える。つまり、日本や日本文化に興味を持ち続けることが、彼らに学習を自律的に継続させ習得の速度を速める一つの要因となっているのである。

## 十、今後の課題

本研究では大学の日本語学科に在籍する主に 4 年生を対象に日本語学習を支えてきた動機づけとその成果との関係を実証的に明らかにしたが、今後は 1 年生から 4 年生までを対象として横断的な調査を行い、学年ごとにその動機づけに違いが見られるのか、違いがあるならどう違うのか、日本語の習得段階と動機づけの変化という観点から研究に取り組みたい。

## 【参考文献】

市川伸一（2001）『学ぶ意欲の心理学』PHP 研究所

磐村文乃（2004）「韓国人女子大学生の日本語学習動機と対日観」

『2004年日本語教育国際研究大会　予稿集』発表1、pp.179～184　日本語教育学会・国際交流基金・国立国語研究所

甲斐ますみ（1994）「台湾における新しい世代の日本語教育」『日本語教育』85号、pp.135～150　日本語教育学会

郭俊海・大北葉子（2001）「シンガポール華人大学生の日本語学習の動機づけについて」『日本の教育』110号、pp.130～139　日本語教育学会

交流協会（2004）『平成15年度「台湾における日本語教育事情調査」報告書』

交流協会（2007）『台湾における日本語教育事情調査報告書 2006年度』

国立国語研究所(2005)『平成16年度　日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究―台湾アンケート調査集計結果報告書―(日本語版)』

鮫島重喜（1993）「第二外国語履修における日本語学習者の意識－台湾の専科学生のアンケート調査を通して－」『台湾日本語学報5』pp.81～98

縫部慶憲・狩野不二夫・伊藤克浩（1995）「大学生の日本語学習動機に関する国際調査－ニュージーランドの場合－」『日本語教育』86号、pp.162～171　日本語教育学会

堀越和男（2006）「台湾の大学の夜間コースにおける日本語学習動機－日本語を専攻する学習者を対象に－」『國文学踏査』第18号、pp.280～292　大正大学国文学会

堀越和男（2006）「日本語関連学科を有する高等教育機関」『いろは』22号、pp.1～4　交流協会日本語センター

Deci,E.L.（1975）*Intrinsic motivation*. New York:Plenum Press.（E.L.デシ　安藤延男・石田梅男（訳）（1980）『内発的動機づけ・実験社会心理学的アプローチ』誠信書房）

Maslow,A.H.(1954) *Motivation and personality*. New York:Harper & Row.（A.H.マズロー　小口忠彦（訳）（1971）『人間性の心理

学』産業能率短期大学出版会）

**【資料】アンケートの項目**

1 因爲覺得學日語很有趣
2 因爲會日語能夠得到其他人的崇拜
3 爲了修得畢業所需的學分
4 因爲想瞭解日本的傳統文化
5 因爲想看懂日本的漫畫
6 因爲對日本文學、小說有興趣
7 因爲對日本的流行服飾有興趣
8 因爲想唱日本的流行歌曲
9 因爲想看懂日本的雜誌、報紙
10 因爲想看懂日本的電影以及電視連續劇、錄影帶
11 爲了更加瞭解日本人的文化、習慣及生活方式
12 因爲想研究日本相關事物
13 因爲日文很容易學習
14 因爲畢業後想在日系公司上班
15 因爲到日本旅行較爲方便
16 因爲想交日本人的朋友
17 因爲想和日本人交流
18 因爲日本是台灣的鄰國
19 因爲受到朋友的影響
20 因爲想瞭解、體驗不同的文化
21 因爲對就業(轉業)有幫助
22 因爲在台灣使用日語的人很多
23 因爲想瞭解日本人的價值觀與行爲模式
24 因爲想玩日本的電玩遊戲
25 因爲會多一種外語是件值得驕傲的事
26 因爲一些機緣巧合而必須學習日語
27 因爲家人、公司主管等週遭親友的建議
28 因爲喜歡學習語言

29 因爲自己的英語程度不佳
30 因爲對日本的政治、経済有興趣
31 因爲日本是先進國家
32 因爲學日語是充實自我學養的方式之一
33 因爲想看懂日本的網站
34 因爲想取得與日本有關(日語能力檢定及導遊人員等)的資格證明
35 因爲將來想對台日関係有所貢献
36 因爲進入現在的學校之前就已經開始學習日語
37 因爲喜歡日本的體育選手、或是歌手、演員等演藝圈的人
38 因爲想瞭解過去的台日關係
39 因爲對日本社會有興趣
40 因爲會日語是職位晉升的必要條件
41 因爲有日本人的朋友、同事
42 因爲會日語感覺很酷
43 因爲家人之中有人說日語
44 因爲要和祖父母溝通
45 因爲對日本的科技有興趣
46 因爲想去日本留學
47 因爲工作上需要使用日語
48 因爲對日本的歷史有興趣
49 爲了應付學校的日語考試
50 因爲想要比朋友更會日語
51 因爲在家庭或是職場中有日本人
52 因爲喜歡日本
53 因爲要在產業及經濟方面勝過日本，就必須先學會日語